

公共文化施設における教育普及プログラムとICTリテラシー

～山口情報芸術センターにおける教育普及プログラム「meet the artists 2011」を例として～

桂 英史[†] 会田大也[‡]

東京芸術大学大学院映像研究科[†] 山口情報芸術センター[‡]

はじめに

山口県山口市の公共文化施設・山口情報芸術センター(YCAM)における教育普及プログラム「meet the artists 2011」で行っている「ライブラリーラジオ」のプロジェクトを、地域における教育普及活動でのICTの意義やメディア・リテラシーという側面から紹介する。

山口芸術情報センター(YCAM)について

山口情報芸術センター(YCAM)は、アート作品の展示スペース、劇場、ミニシアター、市立中央図書館を併設する、山口県山口市に位置する複合的な文化施設である。ICTを駆使したアート作品の展示、演劇、ダンスパフォーマンスの公演、映画上映などのほか、ワークショップやレクチャーなどを開催している。

YCAMでは単なる国内外の作家を紹介するだけでなく、さまざまなアーティストや表現者が山口に滞在し、YCAMの専門スタッフとコラボレーションを行い、表現の可能性を探求している。このコラボレーションから生まれた作品のなかには、国内外で高い評価を受け、世界のさまざまな都市で招聘展示、公演されている作品が多数生まれている¹⁾。

YCAM教育普及活動「meet the artists」

YCAMでは、開館当時から教育普及活動にも重点を置き、独自の方法論でギャラリーツアーやワークショップ・プログラムを開発・実施している。中でも「meet the artist」と市民は、年間一人のゲスト講師と共に、1年を通じてメディアについて考察しながら、ゲスト講師、スタッフ、市民コラボレータが一体となって、共同で制作を行なうプロジェクト型のワークショップである。市民の参加意識を表現や情動に求め、情報通信技術を用いた表現の発露を啓発するとともに、表現力を重視したメディアリテラシーの機会を提供している。

meet the artists 2011「ライブラリーラジオ」の概要

meet the artists 2011のプログラムである「ライブラリーラジオ」プロジェクトは、微弱出力のFMトランスミッターを用いて隣接する公共図書館内で放送することを目的としている。市民コラボレータとともに1年間かけてワークショップ形式で番組を企画している。

市民自らの手で録音・編集し、YCAM併設の山口市立中央図書館内で、毎日放送している。また、音楽につ

いても独立系音楽レーベルHEADZの協力の元、約200曲の楽曲を放送している。自主的に参加している市民コラボレータが図書館やYCAM利用者のためにこれまで企画制作してきた番組としては以下のようなものがあげられる。

- ・ジングル・サウンドロゴ制作: ジングル(音楽の切り替わりや番組の節目に挿入される短い音楽)やサウンドロゴ(番組の特徴を著すような音声)

- ・アーティストインタビュー: YCAM滞在アーティストに、「どんな企画でYCAMに来たのか」「山口の印象」などを質問し、その回答を録音編集放送。

- ・ゲストトーク: 著者による元ニッポン放送社長/オールナイトニッポンDJ亀渕昭信氏や中原中也記念館館長中原豊氏とのゲストトーク。

- ・3.11インタビュー: 2011年3月11日、東日本大震災の日について「あなたは何をしていましたか」という質問を、アーティストや山口市内の人々に質問する。「翌日までどんな災害だったのか詳しく知りませんでした」など、関西以西での状況としてどんなリアリティだったのかを生々しく記録しているインタビューコレクション。

- ・朗読: 図書館内の絵本の朗読を放送。

- ・石の上にも3年: 市民コラボレータの企画者が、身の回りの人たちに「3年以上続けていること」についてインタビューを行なう企画。

- ・お菓子DJ: お菓子について、パッケージや噛みごたえ音などを含めたサウンドトークバラエティ。

教育普及プログラムとしての「ライブラリーラジオ」

このようなプログラムでは目的に親和性をもつICTリテラシーとアプリケーション開発が重要となる。「ライブラリーラジオ」では、三つの具体的なプログラムが同時並行で進んでいる。

(1) 番組制作のための企画会議メディア・リテラシー制作しようとする番組を企画し、実現するためにプレインストーミングを行い、実現に向けて必要とされる資源(人的な資源、ICレコーダやマイクなどのデバイス、編集や制作のためのソフトウェアなどについて)について、ゲスト講師の問題提起とともに、コラボレータが中心となって話し合いを行う。

(2) 必要とされるスキルの修得

番組制作のために必要とされるデバイスの操作やアプリケーションの操作をワークショップ形式で行ってきた。その具体的な手順としては以下の通りである。

YCAM meets the artist 2011: Library Radio

[†]Eishi KATSURA, Tokyo University of the Arts

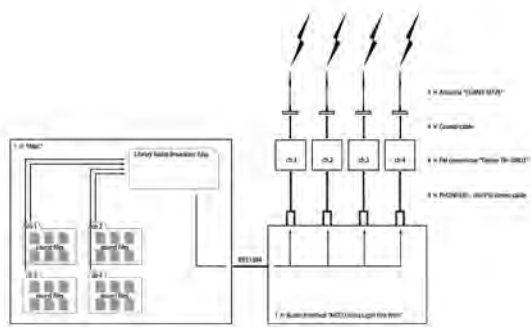
[‡]Daiya AIDA: Yamaguchi Center for Arts and Media

- ・録音: ICレコーダを用いて録音する際に必要とされる基礎知識とスキルを身につける。企画がまだ確定していない段階でも、実際にコラボレータ同士で実験的に番組制作を行いながら、その番組の意義や面白さを議論しながら、音を入力する技術について、たとえばマイクの指向性やその録音方法について学ぶ。
- ・編集: 編集は番組制作にとっての必要不可欠なプロセスであり、メディア・リテラシーにとっても重要なプログラムである。編集に際してAudacityというフリーウェアの編集プログラムを用いている。このソフトウェアを修得することによって、ラジオで必要とされる時系列による編集や編集された番組の構成要素を学習することができる。
- ・パッケージ化: 録音し編集した音声データにジングルやロゴなどを加えて、番組として放送できる形式に体裁をパッケージ化していく。

このようなワークショップを継続的に実施していくことによって、単にサウンドデータで表現するだけでなく、ラジオという電波に乗せて音声をお届けあるいは受けるという、きわめて基本的な日常のコミュニケーション手段を改めて考察する契機となる。

(3) 自動放送創出支援システムの開発

- ・課題: 長期的な運用のために、固定的な人材を投入できないライブラリーラジオの放送のためには、PCからの音声出力を、どんな管理者にとっても(スタッフであってもコラボレータであっても、簡単に番組の更新や変更あるいは運用のために使い勝手の良いアプリケーションの提供がもとめられる。
- ・解決手段: 自動番組送出支援アプリケーション(図1)はディレクトリとして収納された番組編成情報をもとに、被制御機器(送出設備)としてのFMトランスミッターへの出力と切替え、符号化装置の制御、および音声情報の制御(音量調整や簡易な清音)を行うことにより、番組編成情報に沿って自動で放送を行うアプリケーションをMAX/DSPで開発している。



【図1】自動番組送出支援アプリケーション

メディア・リテラシーとしての「ライブラリーラジオ」

「メディア環境が多様化する今日にあつてますます個人にメディアが伝えるメッセージを見抜く能力が必要とされる」という意見は支配的である。もちろん、いくつもの事件もその背景となっていることは言うまでもない。東日本大震災を契機として、幸か不幸かメディア・リテラシーのあり方を論じるための事例には事欠かない。

メディア・リテラシーに関連する研究や実践は数多く行われてきた。研究や実践を行っている分野は、情報学はもとより、社会学や教育学などを中心に数多くの分野で進められている。ただ、情報を処理したり発信したりする能力がメディア・リテラシーと呼ばれることもあるため、メディア・リテラシーという用語はさまざまな文脈で使われている。

とりわけメディアを理解することを理論や実践の核心に据えている社会構成的な立場²は、メディアが現実を構成しているという考え方を前提にしている。この社会構成主義の立場からも、ネットワーク上のコミュニティ形成や新たな利用者モデルを構築して、これからのメディア・リテラシー学習の支援について実証的な知見を提示し得るようなプログラムは待望されている。

その点でライブラリーラジオの長期ワークショップはメディア・リテラシーという観点からは、以下のように整理される。

- ・公共的な文化施設におけるライブラリーラジオの教育普及活動は地域にいて実践的な集合知を、ラジオというメディアのコンテンツとする「メディアワークショップ」の具体的な実践例と言える。
- ・1年に及ぶ継続的なワークショップによる教育普及活動はノウハウと基礎知識が集合知として蓄積だけでなく、メディアが現実を構成することを参加者のコラボレータだけでなく、教育普及担当の専門員そしてゲスト講師である著者も実感することができる。
- ・地域の公共的な文化施設における継承されるべきプログラムを確立した meet the artists そのものが、「地域の現実」を反映するという点で注目すべき成果である。

本事業を契機とした DIY メディアに蓄積された個々の学習者の受容と制作(表現)との関係をモデル化、あるいはメディアが自己生成する規範や相互作用についての評価などは、「メディアが地域の現実を構成するか」という社会構成主義的なテーマへの回答にとって今後の重要課題である。

¹ <http://www.ycam.jp/>

² Masterman, L., Media Education: Eighteen Basic Principles, MEDIA CY, vol17, no3, Association for Media Literacy, 1999.